

JSR 株式会社

2019 年 3 月期第一四半期 決算補足説明電話会議 議事録

(2018 年 7 月 30 日開催)

決算補足資料:

http://www.jsr.co.jp/pdf/ir/h31_2019/h31_3_h_d14h.pdf

P2 決算ハイライト 1

- ・2018 年度第一四半期のハイライト数字です。当期実績と通期見込みと対比しております。
- ・まず、当期より開示セグメントを変更し、セグメント毎に売上収益、営業利益を表示しております。
- ・又、合成樹脂事業は、UMG 社と統合した数値を当期の決算に反映しています。

- ・2018 年度第一四半期は、今年度の計画に対し全体として順調な進捗となりました。
- ・顧客業界は総じて堅調に推移しました。為替は当初想定 105 円に対し 109 円の 4 円円安。原料価格はブタジエンが 1,568 \$ と当初予想の 1,300\$ に対し上昇しました。ブタジエンとその原料であるナフサとのスプレッドも拡大しました。
- ・第一四半期の対計画進捗率は、年度に対し約 25%。対上期では約 50%強と、想定線以上の結果となりました。
- ・為替は 1 円の円安で年間 7 億円程度の営業利益増となりますので、理論上、当四半期では、4 円の円安で 6-7 億円程度、営業利益の押し上げ要因となりました。
- ・当上期から下期に向けては、各事業の売上・利益の成長を織り込んでいます。エラストマーは SBR の拡販。エラストマーの販売傾向として下期型であることも計画に反映しています。又、原料価格上昇に応じた製品価格転嫁を進めます。合成樹脂も、昨年来原料価格が上昇を続けており製品価格への転嫁を進める計画です。デジタルソリューションは先端材料の拡大、ライフサイエンスは成長の加速を継続します。
- ・これらを踏まえ、以下、各事業の実績の詳細を見てまいります。

P3 決算ハイライト 2

- ・各事業の対前年同期、対前期の比較です。今年度よりセグメント変更した各セグメントの前年度の Q 毎の実績も表記しています。
- ・前年同期比では増収減益、前期比では増収増益となりました。
- ・対前年同期の差異理由は、資料に記載の通りです。
- ・対前期では大幅な利益改善です。前 4Q は、四日市工場の本定修や、持分法会社の大幅減益、不要設備の廃棄等も重なり利益が落ち込みましたが、当期は通常の成長軌道である利益水準へ回復しました。
- ・各セグメントの詳細を次ページから見てまいります。

P4 セグメント損益 エラストマー事業

- ・セグメント別損益のエラストマー事業です。
- ・主要需要業界は、国内のタイヤ生産は対前年+4%と堅調に推移しました。
- ・合成ゴム市況は、主要原料であるブタジエンが当期1,568ドル/トンと、当初想定より上昇しました。ナフサ価格(MOPJ)とのスプレッドも拡大しております。

YoY

- ・販売数量・売上収益は対前年で拡大しました。主にSSBRが数量拡大を牽引しました。
- ・営業利益は対前年43%と大幅に減少しました。
- ・価格差が-32億円と大きな要因となりました。前年度は、2016年度4Qにブタジエン価格が2,600\$まで急高騰しスプレッドが2,100ドルまで拡大しました。そのスプレッドが翌17年度1Qのプライシングに反映され利益が大きく増加しています。主に当社のプライシングフォーミュラによるものです。従い、エラストマーの利益は少し長いトレンドで見る必要があり、Appendixの四半期利益推移にて再度説明します。
- ・その他、も資料にある通り、利益減に影響しました。

QoQ

- ・販売数量は前期の販売増の反動で減少しました。
- ・営業利益はQoQ143%と改善しました。17.4Q以降の原料価格の製品価格への転嫁を行い、価格差で+7億円となりました。当期も原料価格は上昇を続けており、引き続き製品価格への反映を行っていく計画です。その他、も資料にある通り、8億円改善しました。

P5 セグメント損益 合成樹脂事業

- ・セグメント別損益 合成樹脂事業です。
- ・ABS樹脂の需要環境は自動車業界向け等堅調でありました。
- ・原料市況は、主要原料であるスチレン、ブタジエン、アクリロニトリルとも上昇が継続しました。
- ・当社グループのテクノポリマーとUMGとの合併によりテクノUMGが4月に発足しました。JSRが持分の51%を保有するJSRの連結子会社です。これにより損益の規模はほぼ倍となりました。

YoY

- ・堅調な需要と拡販努力により売上収益は拡大しました。営業利益は数量増により拡大しております。
- ・尚、営業利益の差異分析の内、旧UMGの増益影響は、その他、に一括して加えておりま

す。従い数量差、価格差は旧テクノポリマーの数値になっています。

QoQ

・前期は期末の固定費増や原料価格の上昇で利益が低調でしたが、今期は改善しました。17年度3Q~4Qにかけての原料価格上昇の製品価格転嫁を行い、価格差により利益が改善しました。しかしながら、当期も原料価格の上昇が続き、この分の製品価格への反映は2Q以降になる計画です。

P6 セグメント別損益 デジタルソリューション事業

- ・セグメント別 デジタルソリューション事業です。
- ・主要需要業界は、半導体、ディスプレイとも総じて堅調に推移しました。
- ・事業全体では、対前年同期、対前期とも、売上収益、営業利益が拡大しました。

YoY

・売上収益は半導体が対前年110%と好調を継続しました。主要顧客の稼働が好調の中、先端ライン向けArFレジスト等が順調に販売を伸ばしました。

・ディスプレイ材料は、配向膜、絶縁膜など主要事業は中国向けなどに数量を拡大しましたが、着色レジストの販売減によりディスプレイ材料全体では売上高は減少しました。

・エッジコンピューティング材料は、需要業界の生産調整を受け売上高は減少しました。

・営業利益は、対前年で2円の円高などによる価格ダウンの影響や半導体材料のR&D費、販売費等の増加はありましたが、半導体材料の数量増により営業利益はプラスになりました。

QoQ

・売上収益は、半導体材料、ディスプレイ材料が増加しました。半導体材料では引き続きArF等先端材料が販売を伸ばしました。ディスプレイ材料は配向膜が販売を伸ばしました。

・前期(1-3月期)は旧正月によるユーザー稼働率の低下もあり、この戻りもQoQでの販売増要因になりました。

・営業利益は売上収益増に加え、前期発生した不要設備の廃棄損がなくなったことで大幅増益となりました。

P7 セグメント別損益 ライフサイエンス事業

- ・セグメント別 ライフサイエンス事業です。
- ・当事業はエラストマー、デジタルソリューションに続く当社の第3の柱と位置付け、当期よりセグメントを独立させました。
- ・当分野では自社材料の展開に加え、MBL、KBI、SELEXIS、Crown等関連する企業に出資し、

戦略的な基盤を整えて来ました。今年度5月末に買収が完了した Crown は6月の損益（売上収益約7億円）は当決算に反映されております。

- ・当期は売上収益、営業利益とも大きく拡大しました。

YoY

・売上高は対前年174%と大きく拡大しました。KBIのCDMO事業が順調に拡大した他、自社材料のバイオプロセス材料（Amsphere A3）や診断薬・中間体の販売も好調でした。

・営業利益は大幅に改善し今期は黒字となりました。昨年はKBIやAmsphereA3の能増投資等先行費用が嵩みましたが、売上成長することで大幅な増益となりました。

QoQ

・売上高はQoQ18%増と好調を継続しました。Crownが6月から連結されました。KBIのCDMO事業は好調を継続。又、AmsphereA3の販売が大きく伸びました。

P8 連結損益計算書

- ・金融収益費用は利益側に1億円でしたが、対前年では為替差益が減少しました。
- ・法人所得税を引いた当期利益は88億円、非支配持分の利益を引いた、親会社株主の当期利益は89億円となり、対前年-5億円でした。
- ・EPS（希薄化前）は前年42.64円、当期40.16円となりました。

P9 連結財政状態計算書

- ・資産合計は、6,784億円となり、前期末から+307億円増加しております。
- ・流動資産は、前期末から-296億円の減少。UMGの統合により営業債権、棚卸資産が増加しましたが、Crownの買収に伴い現金が減少しました。
- ・非流動資産は、前期末から+602億円増加。有形固定資産は、UMGの統合と設備投資により増加しました。のれんはCrownの買収により増加しました。
 - ・負債は、2,461億円となり、前期末から+100億円増加しました。
 - ・流動負債は、+78億円増加しております。UMG統合による増加が主なものです。
 - ・資本は4,323億円で、+206億円の増加でございました。利益剰余金の増加とUMGの統合で非支配者持分が増加しました。
- ・親会社の所有者に帰属する持分は、純利益による増加、配当による減少を差し引いて、+25億円の増加でした。
- ・期末の自己資本比率（親会社所有者帰属持分比率）は、58.4%です。
- ・キャッシュ残高は、現金及び現金同等物に、流動資産その他に含まれる定期預金等を加えたものから、有利子負債を差し引いたネットキャッシュは6月末で約100億円です。

P10 Appendix 四半期推移

- ・参考として過去1年間の各セグメントの売上収益・利益推移を掲載しております。
- ・まずエラストマーですが、下の表にはブタジエン-MOPJ スプレッドを記載しています。当社のマージンは、このスプレッドに影響を受けます。原料価格の製品価格への反映に時間差があり、3ヵ月程度遅れ前期のスプレッドが当期の利益に反映されます。このため、スプレッドを3ヵ月遅らせた数値も表に記載しております。17.1Qは高い営業利益となりましたが、3ヵ月遅れスプレッドが2,153\$と極めて高いこと（対応するBD価格は2,600\$）が影響しています。更に17.1Qのブタジエン価格が下落したため、同時に購入原料価格も下がり、1Qの利益に対して好環境でした。ブタジエン価格は短期的な変動幅が大きく、四半期ではこのように利益が変動します。しかし、ある程度の期間を平均すると、スプレッド700\$前後で、当社の利益水準は営業利益率で6-7%の確保は可能と認識しています。当期の営業利益率は5%程度でした。当期の原料価格上昇の製品価格への未反映があることと、一部評価損の発生等もありました。
- ・合成樹脂も同様に原料価格上昇から製品価格への反映に時間差が発生します。エラストマーに対し顧客とのプライシングフォーミュラの割合が低く製品価格転嫁に時間を要する傾向はあります。
- ・デジタルソリューションは安定的に高マージンを獲得しています。
- ・ライフサイエンスは、成長投資や立上コストの発生、非定期の受注等により利益は四半期で上下しますが、売上収益は成長トレンドにあるのが分かります。今期400億円、来年度500億円の目標に向け着実に顧客基盤を拡大しております。
- ・その他は、次世代事業への投資を含みます。JSR 慶応義塾大学医学化学イノベーションセンター（JKiC）の活動費等が増加しています。

P11 Appendix 通期予想

- ・当年度通期での計画は当初数値から見直しは行っておりませんが、変更はありません。
- ・減価償却費、資本的支出、研究開発の四半期実績を記載しておりますのでご参照ください。

最後に、足元の需要環境については、当初想定から大きな変化は見られず堅調な需要環境にあるとみています。原料価格については、ブタジエン価格が足元1,700\$近くまで上昇しており、ブタジエンナフサスプレッドも1,000\$に拡大しております。スプレッドの拡大は当社にとってプラスですが、短期的には利益の変動要因になります。

為替は足元111円で推移しています。予算前提の105円から円安であり継続する場合は利益にプラスとなります。

ライフサイエンスは今後も売上収益成長が見込まれます。KBI, SELEXISの共同事業が進むなど、シナジー効果も表れてきています。

尚、本日 50 億円を上限とした自社株買いを発表しました。今年度は既に配当を 50 円から 60 円に引き上げる発表をしておりますが、今回自社株買いも行うことにしました。

自社株買いの理由は、「当社は成長投資に向けた財務の健全性を確保しつつ、総還元性向 50%を目安に」という当社の株主還元方針に基づくものです。今後も成長に向けた投資を最優先としますが、当方針に基づく株主還元にも取り組んでまいります。尚、5 月末に Crown の買収は完了、法人税、配当等当年度の支払いピークを終えた 6 月末時点の短期有価証券も含めたネットキャッシュは約 100 億円であり、今回自社株買いを行っても、財務の健全性は確保できています。

以上